

自然体験活動指導者養成研修

1. 参加者

募集人数	応募者数	参加決定数	参加者数
20名	17名	15名	15名 (福井14名、岐阜1名)

2. 事業内容 (概要)

◆ねらい

- ・自然体験を通して、自然を知り、自然に興味を持つ機会を提供する。
- ・自然に関するスキル（海の活動やキャンプ）を高める機会を提供する。
- ・子どもと自然との関係、教育における自然体験の意味を深める機会を提供する。

本事業は、幼児期の自然体験活動の推進のために、幼児を対象とした「しぜんはともだち」事業とともに、福井県小浜市と連携して、平成27年度から実施している事業である指導者自身がまず、参加者として自然の中で様々な体験をすることで、自然に対する理解を深めてもらいたいと考えている。こうした理解がある指導者が、子どもたちの自然体験活動に携わっていくことで、よりよい指導・支援、工夫などが行われるようになることを目指している。特に、幼児教育は、「環境を通して行う教育」が基本とされて

おり、「遊びを通じた総合的な指導」により資質・能力を育んでいる。こうした教育に関わる指導者が、「自然」という環境で、思いっきり「遊び」を体験できる機会を提供していくことも、座学で様々な知識や技術を伝えていく研修同様に、重要ではないか、自然に対する「原体験」を得られるような機会も研修として位置付けられるのではないかと考え、実施している。

◆期日・期間

2019年7月25日（木）～ 7月26日（金） 1泊2日

◆主催

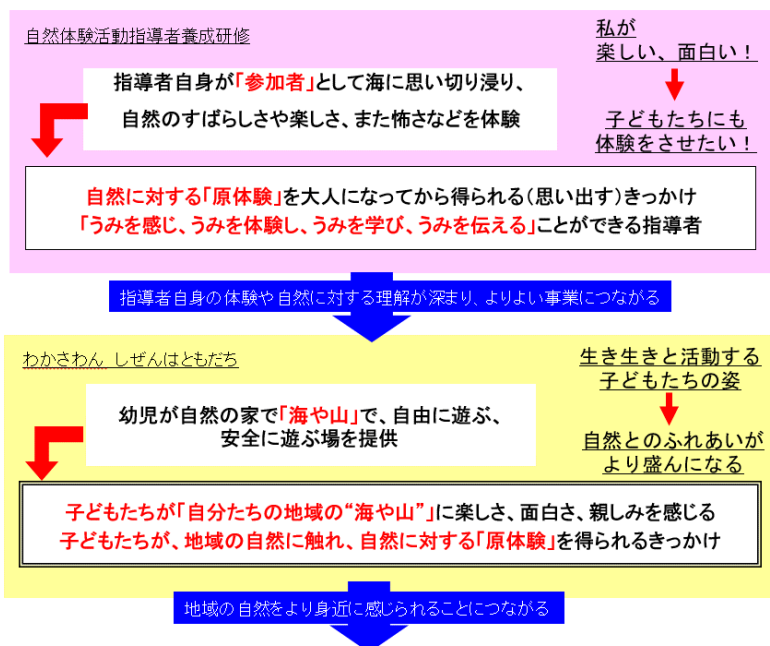
国立若狭湾青少年自然の家 及び 宮の浜

◆後援

福井県・愛知県・滋賀県・京都府・大阪府 各府県教育委員会 小浜市教育委員会

◆参加者分析

主に保育士や幼稚園教諭等の幼児教育関係者を対象として実施しており、連携先の小浜市から多くの参加を得ている。平成30年度からは、幼児教育関係者と学校教育関係者が共に活動す



る中で、互いの理解が深まり、幼保小連携の一助となる機会と考え、小学校教諭も含めて広く教育関係者に広報をすることとしている。小学校を中心に広報先を広げてはいるが、学校教育関係の参加者は、まだ、それほど多くないのが現状である。

また、本年度は、保育所に通う子どもの保護者（父親）の参加が2名あった。幼児期の子どもたちの自然体験活動を推進するためには、保護者の理解を深めていくことも、大切なことだと考える。今後も体験を重視した研修の機会を継続して実施しながら、自然体験活動の魅力や海と関わる楽しさを感じてもらいたいと考えている。

表1. 参加者数の推移

年度	参加者数	幼児教育関係者	学校教育関係者	小浜市からの参加者
平成27年度 (2015年)	24	16	4	15
平成28年度 (2016年)	16	13	1	13
平成29年度 (2017年)	11	9	2	9
平成30年度 (2018年)	15	11	3	9
令和元年度 (2019年)	15	11	2	11

◆企画のポイント

座学の講習は設けず、自然の中にできる限り長くいてもらいたいと考えているため、シーカヤックでのツアーと無人浜でのキャンプ、スノーケリングを中心に活動することとしている。また、体験して感じたことや考えたことを共有する場として、1日目夜と2日目の最後にふりかえりの時間を設けている。

講師には、プロシーカヤックガイドであり、当施設の教育事業にも長年関わっていただいているグランストリーム代表の大瀬志郎氏、当施設の元事業課長であり、自然体験活動のみならず、学校教育や幼児教育に関する造詣も深い、やまなみ保育園園長の大森和良氏の2名を招いている。講師の二方とも、海での活動に関する安全管理・リスクマネジメントに非常に長けており、また、真剣に自然の中で遊ぶ姿を見せていただくことができる。一緒に活動することで、学ぶことができる講師である。

日程

	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22		
7月25日(木)		受付	オリエンテーション	「自然体験活動の技術Ⅰ」 シーカヤック・ 天気の見方	昼食(弁当)・ 休息		シーカヤックで海を渡る・無人浜へ			「自然体験活動の技術Ⅱ」 スノーケリング		「自然体験活動の技術Ⅲ」 テント設営・アウトドアクッキング① (夕食作り)			「活動のふりかえり①」 自然体験・ 教育について		就寝	
7月26日(金)		アウトドアクッキング② (朝食作り) 鳥の声で目覚める	シーカヤックで海を渡る・自然の家へ	「自然体験活動Ⅳ」 スノーケリング	昼食(弁当)・ 休息		活動のふりかえり②	解散										

講師

「自然体験活動の技術Ⅰ～Ⅳ」 講師：グランストリーム代表 大瀬 志郎 氏
 「活動のふりかえり①・②」 講師：やまなみ保育園園長 大森 和良 氏

昨年度に引き続き、下記の13項目からなる事業評価アンケートを作成し、事業実施後に参

加者に「とても思う」「そう思う」「どちらとも言えない」「そう思わない」「全くそう思わない」の5段階で回答してもらうようにした。オリエンテーションの際に参加者とこの内容を共有する時間を設け、本事業を通して感じてもらいたいことや学んでもらいたいことについて、あらかじめ理解してもらうことにも活用している。

また、こちらも昨年度に引き続きではあるが、本事業中に撮影した写真は、事業終了後、すぐに参加者に配布するようにしている。海の中も撮影できる防水カメラを複数台準備し、参加者が気軽に撮影ができるようにした。参加者が、撮りたいと思った景色や生き物、海の中の様子などを撮影し、現場に戻ってから、子どもたちに見せてもらいたいと考えて行っている。

＜事業評価アンケート項目＞

- ① 自然体験に対する興味が深まった
- ② 海や自然が好きになった
- ③ シーカヤックに対する興味がわいた
- ④ スノーケリングに対する興味がわいた
- ⑤ 野外炊事やテント設営の方法がわかった
- ⑥ 自然の中で過ごすことは楽しいと思えるようになった
- ⑦ 自然の怖い面や危ない面も知った
- ⑧ 天候、気象についての関心が深まった
- ⑨ 仮設トイレを使うことができるようになった
- ⑩ 自然に対応する力が参加前よりも付いた
- ⑪ 子どもたちを自然の中に連れて行ってみたいと思う
- ⑫ 参加者同士のつながりからネットワークが広がった
- ⑬ 参加に対する満足度

◆運営のポイント

活動内容・時間、場所などについては、当日の海況、参加者の様子を見ながら、講師の大瀬氏に判断していただきながら、柔軟に対応できるようにしている。シーカヤックの目的地（テントで宿泊をする場所）は、当施設の目の前に広がる海、矢代湾の対岸にある宮の浜に設定はしているが、海況によっては、そこに行くことが難しいことも考えられる。そのため、当施設の近くにあるカタボコ浜も目的地の候補としている。また、カヤックのルートについても、右の図にあるように、年度によって大きく変わる。平成28年度のルートは、南風が強かったために、南下してから西側に向かうルートを取っている。また、平成30年度は、北よりの風であったため、湾を横断してから南下するルートを取っている。本年度は、比較的穏やかな海況であったため、ほぼ直線距離で進むことができた。



図1 本事業における活動エリア

このように、目的地も、漕ぐ距離や時間も読めない部分もあるために、プログラムについても、時間で決めるのではなく、暗くなる前に、泊まるためのテントを張り、夜過ごすためのタープを張り、食事を作るの準備をするというように、「やるべきこと」をただ並べておくだけで捉えるように心がけている。自然体験の一つとして、時計が刻む時間に縛られず、自然の変化から感じられる時間も感じてもらいたいと考えている。スノーケリングをしていたらあつという間になつていたというような時間の流れの早さ、空がゆっくりと夕焼け色に染まっていくような時間の流れのゆったりさなど、自分自身の心持ちによって時間の流れは変わってくる。また、宮の浜は東側に向いている浜であるため、朝日が昇ってくる様子を見ることができ。太陽の動き、空の明るさの変化から時間を感じてもらいたいとも考えている。

また、使ったテントを干したり、食器を洗ったり、物品を片付けたりすることもプログラムの一環として考えており、参加者とともに行う時間を設けている。たった1泊2日ではあるが、職員も参加者も講師も、互いに協力し合い、一緒に過ごす仲間として考え、この研修を作りたいと考え運営している。

◆安全管理のポイント

シーカヤックでは、右の図のような洋上での体形を計画している。先頭は大瀬氏、中間に大森氏、最後尾から担当職員がそれぞれ1人乗りのカヤックに乗艇する。参加者は、2人乗りのカヤックに乗艇するが、参加者が奇数となったため職員が1名、参加者とともに乗艇することとした。監視艇として、当施設の作業船「くろさき」が伴走し、テントや食材などの無人浜に必要な物品を運搬しつつ、不測の事態に備えるようにしている。昨年度は、参加者が船酔いで漕げなくなってしまい、くろさきに寄せ、先に浜まで送ることもあった。くろさきの担当職員はいつでも交代ができるように準備している。また、安全対策として、以下の7つの項目を取っている。

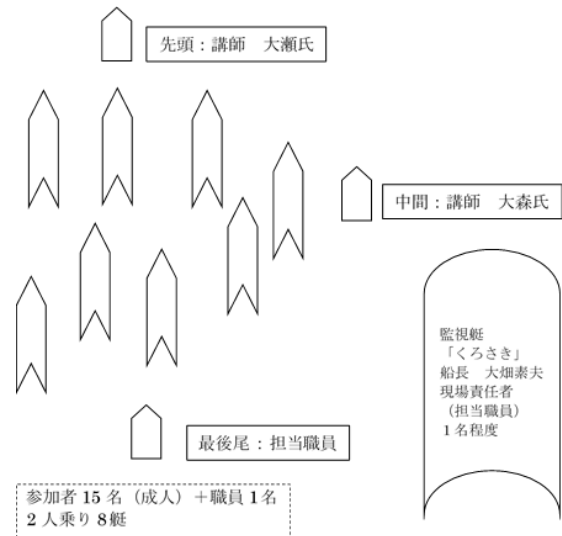


図2 洋上での体形の案

- ① 監視艇「くろさき」には当事業担当者が乗艇し、事故防止等の監督に当たる。連絡方法は業務用無線機及び携帯電話を利用する。
- ② 監視艇「くろさき」によって接近船舶に対しては赤旗、拡声器等により注意喚起するとともに、海中転落者および航行不能艇等の救助に当たる。
- ③ 監視艇「くろさき」と実施本部は業務用無線機及び携帯電話により常時連絡体制を確保する。
- ④ 気象・海象に注意し、気象警報（風、波、雷等）が発令された場合及び以下の基準に達した場合、又は同基準が予想される場合には行事を中止する。
 - (ア) 平均風速10 m/秒以上、波高1.5 m以上、視程10 km以下
 - (イ) その他 関係当局から指示があった場合
- ⑤ 参加者全員に救命胴衣を着用させる。
- ⑥ 事故発生等、緊急時は直ちに応急処置を講じ、監視艇の他、当所所属艇わかさ（定員28名）により救助を実施するとともに、別添「緊急時の連絡体制」により、海上保安部（署）へ電話等で報告する。
- ⑦ 行事の中止、終了時は速やかに海上保安部（署）へ電話等で報告する。

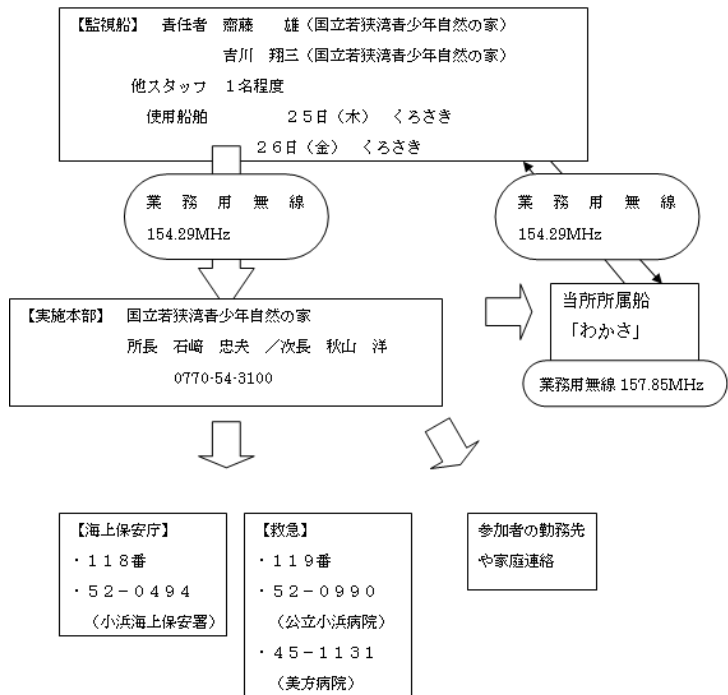


図3 事業当日の連絡体制

また、図3のような連絡体制をスタッフで共有して実施している。

事業を実施するにあたっては、活動海域を管轄している「敦賀海上保安部小浜海上保安署」に以上のような安全対策等をまとめた「行事届」を作成し、提出している。また、宮の浜を利

用するにあたっては、小浜漁業協同組合にも相談し、宮の浜を共同管理している「西小川」「阿納」「犬熊」の漁家組合長に利用依頼書を提出している。

3. アンケート結果

(1) アンケート

表2. アンケート結果

項目	満足	やや満足	やや不満	不満
①事業全体をとおしてどうでしたか	92.3	7.7	0.0	0.0
②この事業のプログラムはどうでしたか。	92.3	7.7	0.0	0.0
③この運営の運営はどうでしたか。	92.3	7.7	0.0	0.0
④職員の指導・助言や対応はいかがでしたか。	84.6	15.4	0.0	0.0

4 満足 3 やや満足 2 やや不満 1 不満

自由記述

- ・ 大人も自然の体験ができるという所が良い。①
- ・ 時間や予定にとらわれず、ゆったりとしていてよかった。②
- ・ 運営しすぎない運営がとても良かったです。③
- ・ テントの張り方やシーカヤックの漕ぎ方など、丁寧に教えて頂けてよかった。④

(2) 事後のふりかえりから

- ・ 子どもの気持ちに戻してもらえる研修だと感じた。子どもたちが普段「先生、これやってみたい!」「もっとあんなのやってみたい」と言っている気持ちもよくわかった。
- ・ 初めてのことに挑戦できた2日間。次はどうするんだろう、どうやってやるんだろうという思いが次々に浮かんで来て、子どもたちも、園生活で同じように感じるなあと思う場面がたくさんあり、少し子どもの目線になれたかなと感じる2日間であった。
- ・ 体力的にちょっと辛く感じた時に、周りの人と言葉を交わしたり、声をかけてもらったりするのは、思っていたより気持ちが楽になる。子どもたちに自分もそんな風に温かい言葉や声をかけて寄り添っていきたいと思えた。
- ・ 新しいことに挑戦するのは不安なこともあるけれど、楽しみでワクワクするので、そういう気持ちを子どもたちにも感じてもらえるといいなあと思った。
- ・ 私も最初は、不安でドキドキというところから始まって、今日はチャレンジしてみようと思うことができた。子どもたちがドキドキから始まり、チャレンジするという事は、私がいつも見守っている保育でもよくあることなので、実際にこういう経験ができ、子どもの気持ちになれたことがすごくよかった。
- ・ 2日間で、小さな成功体験が積み重ねられた。カヤックが楽しくて、初めて朝日をみながら漕いだ。これまでやったことがないができたということ自体が、一つの成功体験だと思う。こうした成功体験が、教育の中でも、家庭の中でも、子どもたちばかりではなく、大人もできる機会があれば、素晴らしいことだと思う。
- ・ 3回目の参加で初めて朝日を見たが、40年以上生きてきてこれまで何度も朝日を見てきたはずだが、今日の朝日は自分の想像を超えるぐらい神々しくて、感動した。普段の生活でも、学校の生徒や自分の子どもには感動を与えたいと色々演出をするのですが、自然に放り込むということに勝るものはないと改めて感じた。

4. 成果と課題

表3 事業評価アンケートの結果

項目	とてもそう思う	そう思う	どちらとも言えない	そう思わない	全くそう思わない
子どもたちを自然の中に連れて行ってみたいと思う	92.3	7.7	0.0	0.0	0.0
自然に対応する力が参加前よりも付いた	92.3	7.7	0.0	0.0	0.0
事業に参加して、満足している	84.6	15.4	0.0	0.0	0.0
参加者同士のつながりやネットワークが広がった	69.2	30.8	0.0	0.0	0.0

海や自然が好きになった	61.5	38.5	0.0	0.0	0.0
シーカヤックに対する興味がわいた	61.5	38.5	0.0	0.0	0.0
天候、気象についての関心がふかまった	61.5	38.5	0.0	0.0	0.0
自然に対する興味が深まった	53.8	46.2	0.0	0.0	0.0
スノーケリングに対する興味がわいた	53.8	46.2	0.0	0.0	0.0
野外炊事やテントの設営方法がわかった	46.2	53.8	0.0	0.0	0.0
自然の怖い面や危ない面も知った	46.2	53.8	0.0	0.0	0.0
自然の中で過ごすのは楽しいと思えるようになった	53.8	38.5	7.7	0.0	0.0
仮設トイレをつかうことができるようになった	30.8	38.5	7.7	15.4	7.7

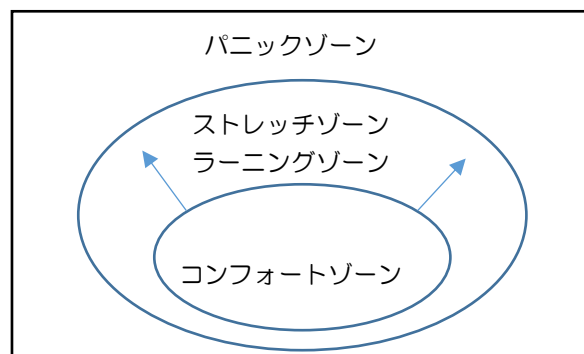
参加者のアンケート、事後のふりかえり、事業評価アンケートの3点を参考に、本事業の成果と課題を挙げていく。

(1) 本事業の成果と課題

◇体験を重視した研修の意義とその効果

「聞いたことは、忘れる。見たことは、覚える。やったことは、わかる」という老子の言葉にもあるように、「わかる」ためには「やったこと」、つまり体験することが大切である。近年、子どもだけではなく、大人、特に若い世代も体験が不足していると言われている。体験が不足していると言われている大人に、自然や体験活動の効果、子どもと自然の関係について、参加者にわかってもらいたいと思うと、まずは、体験をする機会を設けようとするのは、素直なことではないだろうか。1泊2日ではあるが、そのほとんどを自然の中で過ごす体験は、参加者の自然に対する興味関心を否応なしに引き出している。表3の事業評価アンケートの結果をみても、「子どもたちを自然の中に連れて行ってみたいと思う」「自然に対応する力が参加前よりも付いた」に「とてもそう思う」と答えた割合は、9割を超えている。

では、どんな体験が適切なのか、それは、参加者にとっての体験活動が、どの程度の普段とは異なる「負荷」になっているかを考えていく必要がある。体験活動に関する負荷については、3つのゾーンを考えると分かりやすいと言われている。私たちは、普段、心地よく安心して過ごせる環境の中に身を置いている。それをコンフォートゾーン（Cゾーン）という。コンフォートゾーンの中には、初めてのことに挑戦したり、新しい発見をしたりすることは難しい。そこから一歩足を踏み出すことで初めて、ドキドキワクワクといった不安や緊張、楽しさや高揚感を感じることができる。その部分は、ストレッチゾーン（ラーニングゾーン）と言われ、自分自身を高めたり、視野を広げたり、新たな知識や技術を得られたりする学びの機会となる。そうすることで、自分自身のCゾーンも広がっていく。しかしながら、ストレッチゾーンの外側には、自分のスキルではどうすることもできない、どんな状態かも判断することができなくなってしまうようなパニックゾーンが広がっている。達成することが不可能なような課題や過酷な状況に放り込まれることは、過度なストレスや時には命の危険も伴うことにもなってしまう。パニックゾーンにまで達しないような適度な「負荷」が大切になる。どのような「負荷」が適切になるのか、プログラム内容をこれまで試行錯誤してきて、現在に至っている。



平成27年度は、初日にカヤックとスノーケリングを行い、本館に宿泊し、2日目に近くの「カタボコ浜」という無人浜まで往復するような内容であった。よりダイナミックな活動もできると講師の大瀬氏、大森氏とも相談し、行き先をさらに遠くの「宮の浜」、そして無人浜でのテント泊をするといった現在の内容となっている。平成29年度からは、昼食を弁当とし、2日間のほとんどを屋外で過ごすようにした。また、テントや寝袋を干したり、使った食器を洗っ

たりといった片付けも活動の一つとして捉えて、参加者が一緒になって行うようにしている。平成30年度からは、活動については、この内容が適切であると考え、継続して実施している。

目的地に挙げている「カタボコ浜」「宮の浜」も十分に非日常的な雰囲気を感じることができる場所にあるが、陸路でも行くことができる場所である。天候の急変やケガや病気などの緊急事態には、安全にその場から退避できるようになっている。リアス式海岸が連なる若狭湾沿岸には、無人浜はいくつかあるが、陸路とつながっている場所を選ぶことで、安全にまた安心して活動ができるように配慮している。シーカヤックで漕ぐルートも、湾岸の国道から見えるところである。日常生活に近い自然で体験をすることで、普段見慣れている風景かもしれないが、実際に視点を変えて（陸からではなく、海から見て）みるとまた違って見えてくるだろう。普段の生活と自然が近いことも、適度な「負荷」にとっては重要な意味を持つだろう。この若狭地域だからこそできる体験である。

自然環境以外にも、協力したり支え合ったりする仲間、安心感を与えてくれる指導者など、人の存在も大切である。他人の存在があることで、成長できる場に自身の身を置くことができる。シーカヤックについては、当施設では、2人乗りを活用している。波に揺られながら、時には風に向かって、パドルを動かしながら、2人の息を合わせる必要がある。何気ない会話をしながら、同じ動きを繰り返すシンプルな活動だからこそ、「協同」や「協力」することの意義や共に活動をする仲間がいる「安心感」といったことに気づくこともできるだろう。

このように体験を重視した研修の場合は、参加者にとっての「負荷」に注目してみることが大切ではないかと考えている。例として、「活動」「環境」「人」といった面を挙げたが、これ以外にも、天候や海況といった不確定な要素も加わってくるだろう。これについては、運営側も指導者も、もちろん参加者も、その状況に合わせて、対応していくしかない。その時々に合わせて柔軟な運営に心がけつつ、そこにいるすべての人たちが学びの場を創り出していくような雰囲気ができるのは、体験を重視した研修ならではのことだろう。もちろん座学等を通して、理論的に子どものことや体験活動のことを理解していくことも大切なことである。しかしながら、頭で理解するのと同じくらい、自分自身が自分自身の体験を通して、納得したり、心を動かしたりすることも大切である。「やったことは、わかる」「百聞は一見に如かず」の言葉にあるように、今後も「体験」を通した研修を継続的に実施しながら、その内容や意義を深めていきたい。

◇「遊び」の価値を高める事業の重要性

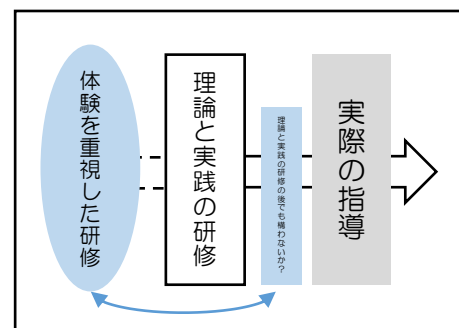
自然体験の原点は、自然の中での遊び、外遊びであると思う。遊びについては、オランダの歴史家ヨハン・ホイジンガやフランスの思想家ロジェ・カイヨワによる研究が有名であるが、人間は遊びで進化したとも言われているように、人間と遊びの関係性は非常に深いものがある。また、遊びは子どもたちの発達や成長に大きな影響を与えているとも言われている。遊びを通して、考えたり、工夫したりする思考力を高め、また様々な人と一緒に遊ぶことで、協力したり、折り合いをつけたりする社会性を育むなどはよく言われていることである。しかしながら、子どもたちを取り巻く環境の変化から、子どもたちが外で遊ばなくなっていると言われて久しい。三つの間、「三間（さんま）」がなくなっていると表現されることもある。一つ目の間とは時間。放課後などの遊ぶ時間が、塾や習い事によってなくなっている。二つ目の間とは遊ぶ空間。空地の住宅化が進んだり、公園での禁止事項が増えたり、子どもたちが自由に遊べる空間がなくなっている。三つ目の間とは遊ぶ仲間。ゲームやタブレット端末の普及で、大勢で遊ぶことがなくなっている。これまでは、普段の生活の中で、遊びを通して様々な体験をして、成長してきた子どもたち。それが難しくなってきた現代において、意図的、計画的に、遊びをはじめとする様々な体験の機会を提供するために、自然体験活動を教育としてとらえる野外教育という概念が広まった。現在では、野外教育というよりもむしろ自然体験活動という名称に、すでに教育的な視点が加えられているようにも感じられる。自然体験活動とは、「自然の中で、自然を活用して行われる活動であり、具体的には、キャンプ、ハイキング、スキー、カヌーといった野外活動、動植物や星の観察といった、自然・環境学習活動、自然物を使った工作や自然の中での音楽会といった文化・芸術活動などを含んだ総合的な活動である」*と定義されている。こうした様々な自然体験活動を、教育的な目的を持って提供することで、子どもたちがかつて「遊び」を通して体験してきたこと、学んできたことを提供していこうとしているのが

現在私たちが実践している体験活動の源流にはある。

子どもたちにとっての自然体験活動は、教育的な意味合いが強くなっているが、一方、大人にとっての自然体験活動は、趣味や娯楽といった意味合いが多いように感じられ、余暇活動として位置付けられることが多いだろう。このように、「遊び」の機会減少を危惧して出現してきた「自然体験活動」ではあるが、成長に必要であると言われる子どもたちにとっての「自然体験活動」と、余暇活動、レジャーとして捉えられることが多いと考えられる大人にとっての「自然体験活動」は、同じ言葉であっても、その対象が異なることで、それがもたらす効果は異なるようにも思われる。平たく言えば、「自然体験活動」は、子どもたちにとっては学びであるが、大人にとっては単なる趣味の時間として捉えられてしまっているのではないか。しかしながら、大人にとっても、子どもたちにとっての自然体験活動、つまりは「遊び」をその源流に持つような自然体験活動の機会は、重要な意味を持つと考えたい。それは特に、子どもたちの関わる指導者にとって、子どもたちの感情や心の動きを理解するために、大きな意味を持つものだと感じる。

なぜ、大きな意味を持つのかについて、2つの視点から考えてみたい。1つは、「自然体験活動」についての理解を深めるためであり、もう1つは、「子どもに寄り添う」ことができる大人になるためである。

自然体験活動に関する研修の多くは、実習を伴いながら、座学での講義も含め、理論と実践を学ぶことができるようになってきていることが多い。もちろん座学などの講義や研修を通して、子どもたちの成長過程や心理について学ぶことは大切な機会である。一方で、自然体験活動の醍醐味であるダイナミックな活動をしたり、日常生活から離れ時間を忘れ自然の中でゆったりと過ごしたりすることは十分にはできない。体験不足と言われているのは、子どもたちばかりではなく、主に若い世代の大人にも当てはまるだろう。そうした人たちにとって、まずは、理論と実践の研修の前に、体験を重視した研修の機会を提供することは、自然体験活動を理解する上で、必要だと思う。私自身のことで言えば、これまでに様々な体験をさせていただく機会があり、こうした体験が様々な事業の企画運営や指導の際の基礎になっている。野外教育について学べる大学等においても、様々な実習が計画されている。しかしながら、原体験とも言えるような体験ができる場面は、先ほど述べたように余暇活動としての機会が多く、研修として位置付け、子どもたちの自然体験活動と結び付けているような機会は、青少年教育施設でしかできないのではないかと思う。今後の青少年教育施設にとって、子どもたちのみならず、大人にとっても「遊び」がその源流にある自然体験活動を提供していく機会を創出することについては、今後も検証していく必要があるが、理論と実践の研修とは別の研修として、今後も継続していきたい。



本事業で、主な対象としているのは、幼児教育の関係者である。幼児教育の関係者にとって、「子どもに寄り添う」ことは、非常に馴染みのある言葉であると言われている。この言葉は、単に、子どもたちの傍ににいるということではなく、子どもの思いや気持ちといった子どもの心を理解しようとする大人の姿勢を表している。このような「寄り添う」とことと体験する機会の関係については、今後深めていきたいテーマである。

「自然体験活動」と「遊び」の線引きについては、提供する側に「教育的」な意図があるか否かで決まってくると考えられる。であるならば、この「教育的」な意図は、大人側からの提案として、子どもたちに示されていることになる。もちろん、大人は、子どもたちのことを考え、子どもたちのためにと考えている。しかしながら、子どもたちが自らの意思で遊びを通して体験したり学んだりしてきたものと、提供する側が大人であり、そこに教育的な意図がある自然体験活動を通して体験したり学んだりするものは、もしかしたら、似て非なるものではないだろうかとも思ってしまう。

子どもたちががかって「遊び」から学んできたことを、自然体験活動を通して学べる機会にしていくために大切になってくるのが、自然への理解や子どもたちに寄り添うことではないかと思う。5ページにある本事業の参加者からのふりかえりからも、夢中になること、楽しむこと、

自然に感動すること、仲間と関わることを通して、子どもの気持ちを想像し、子どもの立場になって考えるきっかけになったという感想が見られる。今後も、こうした体験を中心とした機会も提供しながら、自然体験活動指導者養成事業について、理解を深めながら、事業の企画運営を進めていきたい。本報告書が、その一助になることを願う。

※ 青少年の野外教育の充実について（平成8年7月）

（2）課題

○ねらいに対する事業の課題

2つ目のねらいである「スキル」を高めることは、1泊2日での研修の中では達成することができないことであると改めて感じた。表3の事業評価アンケートの結果をみても、「シーカヤック・スノーケリングに対する興味がわいた」という項目は、「とてもそう思う」と答えた割合が高かったが、それに比べて「野外炊事やテントの設営方法がわかった」については5割以下、「仮設トイレをつかうことができようになった」については3割程度であった。本事業においては、自然体験活動を通して、指導者としての資質向上を図る事業であるため、こうした「スキル」については、できるようになることを目指すのではなく、「やったことがある」ことを増やすことを目指してもよいのではないかと考えられる。

○事業参加者のフォローアップ調査の必要性

本事業については、同様のスタイルでこれまで5年間継続して実施してきている。その間、延べ81名が参加している。こうした参加者が、実際の教育現場で、子どもたちと関わっている。この研修に参加し教育現場で役立っていることや意識が変わったことなどについて、フォローアップ調査を検討したい。その結果から、今後の研修の方向性も考えていくことができるだろう。この1泊2日はあくまでもきっかけに過ぎないと考えているので、事業のねらいとしている「子どもと自然との関係、教育における自然体験の意味を深める機会」となっているのかどうか、確かめてみたい。

5. 活動の様子



漕ぎ方を練習



いよいよ海へ



無人浜で釣り



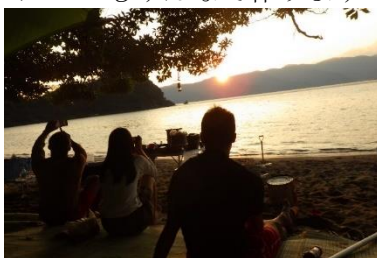
カレーもみんなで作ります



ランタンを囲んでふりかえり



波の音で目を覚ます



美しい朝日が見られました

